

臍のない腹

鹿島檜衛

ブランコを漕いでみあげると視界が、あの映画の長回しのようだと、姉たちに言われてから空がスクリーンになったわたしのまわりで直列につらなって浮ぶ蜻蛉。ともに上下してともなって、彼らのみる複数の宇宙も上下するのだがジュラ期でもそうだったか。碧い影の水平方向に、揺れて白飛びする草叢へぬけていく様子を姉たちの複眼も捉える

わたしたちから、生まれずにすんだものの群れが音もなく高速に水を分け、黍畑を分け、薄曇りの空へと沈んでいくすでに雨は止んでいる、針葉樹のふしくれた枝・白い葉先を撫でて、その温かさがさびしい、蜻蛉たちの、宇宙液晶の向こうでベトナム人が I meet blue crabs in a graveyard と呟いてる、と姉たちは口々に耳うつけどどうでもよくてむしろ半透明の彼女たちの、肢体の高温高熱でひかり輝くのがあのときの焼き場を思い起こさせるので、つらかった

すれちがい手がふれたあとのようにかすかに、燃える、わたしたちの群れ、姉の群れ。雲からのびる指。輝きだす睫東京を歩くと、一秒ごとに巨きい写真の瘡蓋が迫ってきてわたしをやわらかく包んでいく。かつて姉たちは臍のない腹のようなかたちをした岩に跨り、世界には層があるのとわたしに語った、眠っているような顔で。それがなつかしく河原へおりと鳥たちは飛びたつ。腹や頭が夕暮に白く浮ぶ。そこから垂線をおろすと、姉たちが口を開けている